

戦闘好きな少女が暗殺  
教室の一員になるよう  
です。

銅英雄

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

戦いの世界に生きてきた少女は気分転換で京都に赴く。

そこで出会ったのは同じ年くらいの少年少女とタコのような先生だった。

そしてこの出会いが少女を成長させる……。

# 目次

プロローグ前編	1	出会いのは京の都にて	
プロローグ後編		少女は東の都へと移住	
する	10		
第1話	16	転校の挨拶は固定砲台と	
第2話		自律した固定砲台	26
第3話	31	結成！ラムちゃんグループ	
第4話		LとR	37
第5話	49	殺せんせーと兄弟？の転校生	
第6話		気が付いたら審判になっていた	
件			53
第7話		E組の教官は烏間先生以外あり	
えない			61



# プロローグ前編 出会いには京の都にて

私はこの世に生を受けてからずっと戦いの世界で生きてきた。

両親共にその世界でもトップクラスで、特に母はその中でも2、3を争う強さだった。何故1番じゃないのかというと母の親友が2番よりも遥かに強い力を持っているから。両親は勿論、私もその人には尊敬の念を抱いている。

そんな私が戦いの世界を体験したのは2歳の時だった。当時はごっこ遊びの感覚で両親と鍛練していたが、月日が流れるに連れて鍛練も本格的なものになっていくのだった。

私はそんな戦いばかりでも決して嫌という訳ではなく、寧ろそれが生き甲斐でもあった。勿論そんな血生臭い生活の中でも女の子らしい御洒落にもそれなりに力をいれている。母曰く『女の子は御洒落がととても大切』なんだそうだ。

私が7歳になる頃には学校という場所に通うことになった。母の友人によるとこれからの時代は勉強らしく、両親も学校ではかなりの優等生だったので、きっと私も優等生になるだろうと期待していたらしい。

そこから約6年の年月が経過して私は小学校から中学校へと進学した。この6年と

いう時間の中で私は色々と大変な目にあっていたが、その話は割愛させていただく。

中学校の名前は『見滝原中学校』という名前でその中学の生徒の何人かに巻き込まれ『学校でくらはいは戦いのことを忘れた方がいいよ』という母の言葉も虚しく結局は戦いの世界に足を踏み入れてしまうのだが……。

そんな感じのプチ戦いの生活も一旦落ち着き、今は京都と呼ばれる場所に足を運んでいる。理由としては気分転換に旅行でもと母が言っていたので、京都の街並みを見て回っている。

色々見て回り、今私は廃工場にいる。こんな彩り豊かな街にもこんな場所があるものなんだと私は興味深く辺りを見る。色とりどりの景色も好きだけど、私の場合はこういった殺風景な場所も落ち着く感じがして好きなのだ。

等というモノローグを述べていると誰かが入ってきたようだ。

「おら、さっさと入れ！」

そう言いながら入ってきたのは高校生くらいの男数人と私と同年くらいの女の子だった。幸いまだ私の存在には気付いてないので、入ってきた人達を観察してみる。

男の方はよくいる破落戸の類いだらう。戦闘力指数でいうと大きくて6、7といった感じ。

女の子の方を見てみると2人共何かしらの鍛練を受けているのかその高校生達よ

りかは強いが多勢に無勢といった感じで追い込まれているといった様子。手足を縛られてみるみたいだし。しかし……。

（黒髪ロングの子はともかく、もう1人のツインテールの子からは異質な気配を感じる。その気になれば高校生達を全員倒せると思うんだけど……。訳ありで力を隠しているのかな？）

その辺りは何かと私に似ている。私も彼女と同じで力を隠している……というよりは抑えているという表現の方が正しいのかな？両親は優等生だったけど、私の学力は良いとこ上の下って感じだから優等生って言えるのかわからないな……。

そう考えているとそのツインテールの女の子が高校生の1人にソファアールへと投げ飛ばされていた。更には高校生達が彼女達を襲おうと企てていたので、流石に見過ごすわけにはいかず……っていうかこの廃工場そんなに広くないし、私が彼等に見つかるのも時間の問題だったのでゆっくりと飛び出した。そして……。

パシヤツ

???  
side

私は修学旅行中に高校生達に拐われて廃工場へと連れ込まれた。

彼等の会話で私達がこれからどんな目に遭うか悟ってしまい、心の中で助けを求めているとシャッター音が聞こえてその方向を見ると私達と同一年くらいの女の子がカメラを持って歩いていった。

「だ、誰だ!？」

「証拠写真GET。これを新聞社に提出したら高校生の男が中学生くらいの女の子に乱暴って感じの記事で新聞に載りそうだね。勿論貴方達は少年院送りだ」

「てめえ、何時の間に此処に!？」

「貴方達が来る前から此処にいたけど。そしたら貴方達が彼女達を拐って勝手にペラペラと犯罪宣言してたからその会話も録音させてもらったよ」

クスクスと笑いながら淡々と述べていたその子は私達と変わらない年齢なのにどこか大人っぽく思えた。

「はっ!そんな事にはなんねえよ。何故ならてめえも2人のように可愛がってやるからな!!」

男がそう言ったのと同時に2人の男が彼女に襲い掛かる。危ないっ!

「……短絡的だね。よっと」

襲われると思った彼女は男の後ろに回り込み首に手刀を打ち込んだ。凄い……。

それから次々と男達が彼女に襲い掛かるも先程と同様に手刀で彼等を気絶させた。



それはまるでクラスメイトが熱弁しているバトル漫画みたいだった。

「さて、あとは貴方だけみたいだけど？」

「ちっ……！だが援軍が来たぜ。コイツらの分までやらせてもらおうぞ!!」

扉が開いて入ってきたのはボコボコにされている高校生と私達のクラスメイトだった。

「……なんか援軍らしき人の顔面が掴まれてボコボコにされてるけど、掴んでいる人が貴方の援軍？」

「てめえら！何で此処がわかった!？」

高校生は何でそうなったかわからないといった感じでクラスメイト達に問い詰め、彼女は「あつ、違うんだ……」と解つていながらも苦笑いで呟いていた。

「修学旅行の栞1243ページ、班員が何者かに拉致られた時の対処法。犯人の手掛かりがない場合、まずは会話の内容や訛り等から地元民かそうでないかを判断しましょう。地元民ではなく更に学生服を着ていた場合は1344ページ、考えられるのは相手も修学旅行生で、旅行先でおいたをする輩です」

「土地勘のないその手の輩は拉致した後はそう遠くへは逃げず、近場で人目のつかない場所を選ぶでしょう。その場合は付録の1344ページへ。先生がマツハ20で下見した拉致実行犯潜伏マップが役に立つでしょう」

クラスメイト達がつらつらと栞の内容を読み上げる。あの栞にそんな事まで書かれていたんだね……。

「すごいなこの修学旅行の栞！完璧な拉致対策だ!!」

「いや、やっぱり修学旅行の栞は持っておくもんだね」

「んな出鱈目な栞があつてたまるか!!」

クラスメイト達が感心する中で男は突っ込みを入れる。確かにそんな栞は普通ないよね……。彼女も苦笑いしてるし。

「知り合い？」

何時の間にか此方に来てた彼女が尋ねた。

「は、はい。同期生です……」

「そっか。なら私はもういらなかな？」

優しく微笑む彼女はやっぱり私達よりも大人な感じがした。さつきも格好良かったし……。

「神崎さん、その人は……？」

「えっと……。助けに来てくれた人みたい」

「いやいや、さつきも言ったけど、私の方が先に此処にいたからね。状況が状況だったから見過ごすわけにはいかなかったし」

「へえ。ということはこの連中もお姉さんがやった訳？」

「まあ成り行きだけだね」

「凄かったんだよ！まるで不破さんが読んでいるバトル漫画みたいだったし!!」

茅野さんの言った通り彼女は高校生達の首元に手刀を打ち込み無力化させていた。もしも彼女が暗殺教室に入ってきてくれたら……。

「だったら俺達は必要なかったか」

「いや、彼等が何処の学校かわからなかったし、もしも君達が彼等の行ってる学校がわかるんだったら助かるな。それに喧嘩がしたいならあと数人が此方に向かつていてもうすぐ来ると思うから多分彼等の仲間だろうし、その人達の相手をしたらいよいよ」

今の彼女の発言で私達は驚いた。高校生の仲間が何人か此方に来る事に絶望を感じたし、そんな事もわかる彼女からもどこか恐怖を感じたから……。

「そ、そんな事がわかるの……?」

茅野さんが代表して聞いた。他の皆も、勿論私も気になるので彼女の方を見る。

「複数の気配を感じるし、足音も聞こえるからね」

あつけらかんと述べる彼女に対して高校生が不敵に笑う。

「中坊が意気がるな……。呼んどいた連れ共だ。てめえらの様な奴等には見たこともない様な不良……」

扉が開き入ってきたのは坊主頭にされてぐるぐる眼鏡をかけた人達と……。

「ふりよ……ええええええつ!？」

「確かにこんなガリ勉の見た目をした不良は見たことないね。少なくとも私は」

「不良なんていませんねえ。先生が全員手入れをしてしまったので」

私達の担任だった。

???  
side out

「殺せんせー!」

中学生達の1人が殺せんせーという人……?の名前を呼んだ。先生……?。

それからはその先生?が触手を使って高校生達を蹂躪していた。

(かなり速い……。さつき言っていたマツハ20というのも嘘じゃなさそうかな)  
っていうかもう私いらんじやないのかな?

止めは中学生達が栞という名の鈍器で後頭部を殴って終わらせた。

「大丈夫ですか神崎さん、茅野さん?」

「うん、大丈夫!」

どうやら解決の流れだし、私もそろそろ行こうかな。でも黙って出て行くのはなんか

申し訳ないから一言だけ……。

「もう大丈夫そうだから私は行くね？」

私の一言に全員が私の方を振り向いた。あれ？もしかして黙って出て行った方が良かった？

## プロローグ後編 少女は東の都へと移住する

う〜ん……。礼儀として声をかけたけど、そのまま去った方が良かったかな？

「おや、貴方は……？」

「殺せんせー！この子が私達を助けてくれたの！」

「にゅやっ！そうでしたか。私の生徒を助けていただきありがとうございます」

礼を言う殺せんせー？という生物。どう見ても人間……というか地球上の生物には見えないけど……。

「気にしなくても良いですよ。先程も言いましたが私は彼等よりも早く此処にいましたので、彼女達を助けたのは成り行きに過ぎません」

「それでもありがとうございます。何か御礼をしたいところですなぁ」

彼女達を助けたのは本当に成り行きだから気にしなくても良いんだけど、このまま引き下がりそうにないな……。だったら私が一番気になっている事を聞いておこうかな？

「えっと、それなら貴方に聞きたい事があるんですけど……」

「なんででしょうか。何なりと聞いてください。私は先生ですので、悩める生徒の疑問や

質問には答えますよ」

私は貴方の生徒じゃないんだけど……。まあいいや。

「貴方、どう見ても人間じゃないですよね？ 拐われた彼女達と助けに来た彼等の先生をやっているってどういうことですか？」

『……………』

あれ？ なんか黙っちゃったんだけど……。しかも皆顔が青ざめてるし。すると私と殺せんせーと呼ばれる生物以外が……。

『何やってるの殺せんせー!?!』

一気に捲し立てた。

「にゅやつ！ な、なんですか急に!?!」

「国家秘密が何やってるの!」

「また烏丸先生に怒られるね〜」

「し、しまったあああああつ!!」

えつと、私帰つても良いかな？ ……つていうか超絶帰りたいたいんだけど。

「……答えられない質問なら言わなくてもいいですよ？ 私が今日此処であつたことを他言無用にしていければ問題なさそうですし」

国家秘密つて事は殺せんせーと呼ばれる生物の事はなるべく伏せておきたいだろう

し。生徒達と何やら口論してるっぽいから早いところ帰った方が良いよね？寧ろ帰る。そう思っていると話し合い？は終わったようで。

「あの、少し着いてきてもらってもよろしいでしょうか……？」

さつき不良達の前に立ちはだかった時とは違い滅茶苦茶低姿勢になっている。私としては関わりのないようにした方が良いと思うけど、着いていかないと先に進めなさそうだし私はそれに従うことにした。

くそしてく

どうやら話によると殺せんせーと呼ばれる生物は月を半壊させた生物で来年の春頃……卒業式と呼ばれる日程に地球を破壊する。だけど櫛ヶ丘中学校の3年E組の担任ならやつても良いと言うので、E組の生徒……先程の彼女達に事情を説明して殺そうとしている……という話だった。

「それで私はこれからどうすればいいですか？」

「選択肢は2つある。1つは記憶処理で今日見た事は全て忘れてもらうのだが、余りオススメはしない」

そりやそうだ。そんな洗脳紛いみたいな事を人に……況してや子供にやって良いことじゃない。



「もう一つは……?」

「桐ヶ丘中学校3年E組に転校してもらおうことだ」

2つ目の選択肢は一見まともそうに聞こえるけど、これも口封じという意味では一つ目と何ら変わらない。監視して地球を破壊しようとする怪物と同じ空間に隔離するか、記憶を消して一部の記憶がないという不安定な状態で外に放り込むかの違いに過ぎないからね。

とはいえ私からしたら殺せんせーから危険を感じないし、他言すると家族の安全は保証できないという話だけど母も父も殺せんせーに遅れを取るとは思えないし、中学生になってからは一人暮らしなので手続きさえちゃんとしていれば転校という形を取った方が互いにとつても良いだろうし。

「……なら転校という形で御願います」

「……良いのか?」

「転校しなければ記憶処理されるという話ですからね。でしたら転校という形を取った方が御互いにとつてもその良いでしょう。それで登校日は何時からになりますか?」

「修学旅行が明日で終わる。そして土日を挟んで月曜日からの通常授業で君を紹介しようと思う」

「わかりました。では来週の月曜日に桐ヶ丘に向かいます」

そう言つて私は柗ヶ丘中学校のE組の生徒達が宿泊している場所から出ていった。

くそしてく

さて、転校の話を一応お母さん達に伝えておかなかちや。手続きとかは私一人でも出来るから、あとは住居だね。

柗ヶ丘中学は東の都にあるみたいだから、今住んでいる所からだと少し距離があるんだよね……。知り合いの話だと家と学校の距離が遠すぎて周りに怪しまれたつて話だからなるべく近場に引つ越したいよね。

「待つてくださいい！」

住居の事で悩んでいるときっきの黒髪ロングの女の子とツインテールの女の子が此方に走つてきた。

「どうしたの?」

「改めて今日は助けてくれてありがとうございます。わ、私は神崎有希子つていいですよ！」

「私は茅野カエデです!今日はありがとうございますました!」

「これからは同じ学校、同じクラスなんだから敬語はいらさないよ」

態々御礼言いに来るなんて律儀な子達だね。名前を言われたら此方も名乗らない訳

にはいかないか。月曜日まで名乗ることはないかなって思ってたけど……。

「大宮来夢（おおみやらむ）、ラムでいいよ。これからよろしくね」

私の名乗ると2人は元気良く返事をして別れを告げた。

こうして私は来週の月曜日から柵ヶ丘中学校の生徒になることになった。そしてこの出会いが私を成長させてくれる事になる訳だけど、今の私はまだ知らない……。

## 第1話 転校の挨拶は固定砲台と

月曜日。土日の間に引越しも済ませたので、新しい住居からの登校になる。聞いた話によるとE組の校舎はこの山道を登っていく必要があるみたい。AとD組はそことは別の校舎であり、それぞれ本校舎と別校舎と分けられ、E組は後者の別校舎だ。

(凄い山道だなあ……。でも鍛練としては持ってこいなのかもね)

そう思いながら歩いているとE組が通っている校舎に着いた。これは本校舎に比べると酷いなあ……。これは学校側にクレーム入れても良いんじゃないのかな？

とりあえず中に入って職員室に訪れる。

「失礼します」

「ああ、来たか大宮さん。今日からよろしく頼む」

「おはようございます、烏間先生。……まあなるようになりますよ」

烏間忠臣先生。私が此処に来る前に殺せんせーについての説明を丁寧にしてくれた人。防衛省という組織に属してかなり鍛えられている。この人に体育の授業とか教わるのかな？

「カラスマ？誰よこの子？」

烏丸先生と話していると一人の女性が入ってきた。ふむ、素晴らしいスタイルだね。同じ女として羨ましいかも……。

「今日転校してくる大宮さんだ。……というか事前に伝えただろうか」

「悪かったわよ……イリーナ・イエラビッチ。此処では英語の授業を担当しているわ」  
「彼女はハニートラップの達人だ」

ハニートラップの達人……。そんなのが殺せんせーに通用するのかな？疑問だけど、彼女もこの教室において必要な人間だから此処にいるんだろう。

「大宮来夢です。これからよろしく御願います、イリーナ先生」ペコツ

「ちよつと聞いたカラスマ!?こんな良い子がまだいるのよ！E組のガキ共はどいつもコイツもビッチビッチ言うのに!!」バシバシ

「わかったから背中を叩くな!」

仲良いねこの2人……。

くそしてく

烏丸先生から殺せんせー専用の銃とナイフを貰った。これ等を駆使して殺せんせーを殺すようだ。本当にこれでダメージを与えられるのだろうか……?」

キーンコーン♪カーンコーン♪

予鈴のチャイムが鳴ったので、教室に行く。

「そういえばもう1人転校生がいると聞いたんですが、その人は何処にいらっしゃるんですか？」  
職員室で私の他にもう1人転校生がいるという話を烏間先生から聞いたんだけど、それらしき人物が見当たらないので訪ねてみた。

「……彼女ならもう教室にいるだろう」

彼女……ということとは私の同じ女の子ということか。その子とも仲良くやれたらいいな。しかし……。

(なんで烏間先生は言いにくそうに答えたんだろう……?)

そう思っただけで教室を廊下側の窓から覗いてみると教室の後ろの方に大きな機体が見えた。……えっ、もしかしてあの機体が転校生なの？

そんな事を考えている内に自己紹介の時間になった。

「修学旅行で見た者はいらるだろうが、転校生の大宮さんと……ノルウェーから来た自律思考固定砲台さんだ」

……なんか物凄い物騒な紹介を聞いた気がする。そりゃ烏間先生も言いにくい訳だ。気になることは彼女？を含めて色々とおあるけど、とりあえずは私の紹介をしなきゃね。

「大宮来夢です。親しい人は皆ラムと呼んでいますので、皆さんもその様に呼んでください。卒業まで残り1年を切っています、よろしく御願います」ペコッ

『自律思考固定砲台です。よろしく御願致します』

自律思考のAIか……。私の師匠も機械を造るのを趣味にしてるらしいけど、こんなAIも造れるのかな？

「それでは何か質問はありますか？」

殺せんせーが質問タイムを設けた瞬間に殆んど生徒が挙手する。転校生っていうのは凄く興味を惹かれるってお母さんも言ってたっけ。

「ではまずは磯貝君」

「ラム……さんは殺し屋なんですか？」

「呼び捨てで良いよ。……質問に答えると私は殺し屋じゃないけど、戦いの世界で生きてきた……とだけ言っておくね」

私の発言に皆ざわめく。まあ中学生の子供が戦いの世界に生きてきた……なんて言われても反応に困るだけだね。でも事実なんだからしょうがない。

「では次、岡島君」

「好きな男のタイプは!？」

次の質問は青春を謳歌する男女ならではのといった感じの質問だね。でもそんな事考

えたことなかったなあ……。見滝原では特に気にしてなかったから。でも友人に彼氏が出来たと聞いた時はなんか先を越された気分になったっけ。

「そうだね……。一生懸命な人かな？」

この答えは嘘じゃない。実際一生懸命な人は見てて良いなあってなるからね。……とはいえあの弟分達はなんか違う気がするけど。

「では次、不破さん」

「好きな漫画はなんですか!？」

「特にこれっていうのはないけど、バトル物とかは好きかな？」

ああいう漫画は見ると新しい戦略や戦術のヒントが生まれるかもだからね。

「では次で最後にしましょうか。渚君」

最後の生徒は京都で見た神崎さんと茅野さんと一緒にいた男の子だ。……彼からは茅野さんとは別の異質さを感じるね。

「あの、このクラスの……。E組の事をどう思っていますか？」

E組をどう思うかか……。

(私を見定める人、私の顔色を伺っている人、そして自分を抑えている人……。見滝原にも私の事を見定める子がいたのを思い出す。教室に来る前に殺せんせーの暗殺映像を見たけど、まだまだ拙く殺せんせーを殺すのは到底無理……。けどこれだけの個性があ



れば期限までにはもしかしたらがあるかもね)

「……色々思ってたけど、一言で表すなら可能性の塊って感じかな」

「可能性の塊……?」

「うん、このクラスは個々の個性が殺せんせーの暗殺成功に繋がると思ってる。誰がどんな個性を持っているかわからないから暗殺成功のヒントを得るために皆と上手くやっていけたらいいな」

殺せんせーを殺すのはE組。私はそのサポートになるだろう。これは6年前に魔人と呼ばれる敵と戦った時も私は1人の戦士のサポートを努めた時と同じ。まあ最終的に私はその魔人に取り込まれちゃったけどね……。

まあつまるところ私は皆の個性を知る必要があるよねってことだ。

渚 side

今日この暗殺教室に大宮さん……ラムさんが転校してきた。……あと自律思考固定砲台も。

固定砲台さんの事は一旦置いて、クラスの皆はラムさんに様々な質問をした。磯貝君は殺し屋かどうか、岡島君は好きな男のタイプはどんな人か、不破さんは好きな漫画は何か……。岡島君と不破さんの質問は必要なものかわからないけど、ラムさんは普

通に答えてくれた。

「では次で最後にしましょうか。渚君」

質問は僕で最後までいいだ。僕の質問はただ一つ。このクラスをどう思っているか……だ。

するとラムさんは可能性の塊だと言ってくれた。エンドのE組と蔑まれた僕達を評価してくれたのは初めてかもしれない。そう思うとなんだか嬉しくなってくる。

「そういえば授業中じゃなかったら何時でも殺しに来ても良いんですね?」

「ええ、何時でも大丈夫ですよ。殺せるものなら殺してみなさい」ニヤニヤ

殺せんせーはニヤニヤと笑って黄色と緑色の横縞模様……つまり相手を舐めて油断している時の表情になる。この本当にムカつくなあ……。

「じゃあ遠慮なく……」

ラムさんは薄く笑った。その瞬間ラムさんの目付きが鋭くなり……。

ザンツ!

『!?!』

消えたと思ったら殺せんせーにダメージを与えていた。

「へえ……。このゴムみたいなナイフで本当に殺せんせーにダメージを与える事が出来るんだ」

「にゆう……」

これはカルマ君みたいな奇襲？いや、それ以上の精度を感じた。

「もういつちよー！」

ザンツ！

「なっ……！！」

「序でにこれも……つとー！」パンパンツ

「にゆうっ!？」

対せんせーナイフで2発もダメージを与えただけじゃなく、対せんせー弾が入った銃での素早い射撃……。

「はあっ！」

ザンツ！

「ぐっ……………」

「す、すげえ……………」

「こ、これもしかして暗殺成功までいつちやうんじや……………」

ラムさんは人間とは思えない動きで殺せんせーの懐に入り込み更に一撃を与えた。これで地球は救われるの……………」

「はあっ……………はあっ……………！触手だけでなく本体にまで……………。ラムさん、君は一体何者なんですか？」

「私はただの戦闘狂ですよ。……………とはいえここまで動いたのは見滝原の舞台装置を相手にした時以来ですけどね」

ラムさんが攻撃を止めて間もなく殺せんせーの触手は再生された。これはとんでもない人が転校してきたなあ……………。

渚 side out

追い込んだと思ったらすぐにダメージを回復した……………。殺せんせーはまるで6年前に戦った魔人のような恐ろしい回復力だよ。一気に畳み掛けた方が良かったかな？武器についても色々考える必要があるね。

さておき皆が私の動きを見て唾然としてるけど、これくらいはやらないと殺せんせーは殺せないと思うよ。

「殺せんせーを本気で殺すなら今くらいの精度で殺しにいかないと地球が失くなっちゃうよ?」

「……全くその通りなんですねぇ。皆さんもラムさんの様な素晴らし暗殺者を目指しましょう。……とはいえここまで追い込まれたのは初めてですよ。どんな殺し屋でも私にダメージを碌に与えられませんでしたから」

「まあ暫くは情報収集に専念しますよ。あくまでせんせーを殺すのは彼等なんだから……」

そう言つて私は一番後ろの席に座つた。……皆から凄い視線を感じる。悪目立ちしすぎたかな? 私の力は一般とは比べ物にならないし、暫く大人しくしておこう……。

さて、次は固定砲台さんの暗殺だ。どんな技を見せてくれるのかな?

## 第2話 自律した固定砲台

私が座っている席の隣にはもう1人の転校生である自律思考固定砲台さんが設置されている。

(もうちよつとコンパクトに出来たら皆と連携を取りやすいかもね)

そう思いながら授業に使う教科書とノートを出して殺せんせーの授業風景を眺める。すると隣から機械音がしたので、視線を移すと固定砲台さんが機関銃を側面から展開して殺せんせーに発砲した。

(……授業中って殺しに来たらいけないんじゃないかなかったっけ？それを理解していないの？)

殺せんせーは授業中にも関わらず機敏に弾を避け続けてそして授業を続けている。器用だね……。

それからも授業の度に固定砲台は発砲を続けて、私達は発砲によって散らばった弾……というかBB弾を掃除するの繰り返しだった。これが卒業まで続くのだろうか……？

くそしてく

翌日になり学校に着くと固定砲台さんがガムテープでグルグル巻きにされていた。

『……………これでは銃が展開できません』

だろうね。

話によるとまた授業中に発砲されたら堪ったもんじやないから縛り付けたらしいけど……………。

「授業中に発砲した上に掃除をするのは私達だからね。そうなると迷惑になるから縛ったのかも」

『……………理解しました。確かにクラスメイトの安全や利害を考えていませんでした』

「事は失敗から学ぶ事が多い。固定砲台さんもこれからは色々と学べば良いよ」

『はい、そうさせて頂きます。ラムさん、ありがとうございます』

固定砲台さんが理解したようで一安心。あつ、ちなみにガムテープは外しておいたよ。その際に寺坂という男子が文句を言っていたけど、損害賠償の額を言いそれを出せるのかと聞いたら悔しそうに押し黙った。

くそしてく

更に翌日。教室の扉を開くと……………。

『おはようございます、ラムさん！』

「お、おはよう……」

物凄い感情豊かになっていた。とんでもない変化である。そりゃ誰だって戸惑うよ。どうやら殺せんせーが固定砲台さんさんを改良したそうで残金が5円になってしまったようだ。今度何か御菓子でも買ってあげようかな……？

そんな固定砲台さんは瞬間に人気者となって、律という呼び名も得た。私はというと……。

『ラムさん、将棋やりましょう！』

律に誘われて将棋をやる流れになった。

(将棋か……。一応師匠からルールを教わったけど、やるのは初めてなんだよね)

「いいよ。私で良ければやろうか」

『はいっ！』

良い笑顔。まあなるようになるか。

くそしてく

よし、これでなんとか詰められそうだ。こういった知的遊戯は暗殺の戦略を立てるのにも役立ちそうかも。



「王手」パチッ

『……参りました』

「すげえ……。律に勝っちゃったよ」

「ラムさん凄い！」

「いやいや、結構ギリギリだったよ」

一步のミスすら許されなかったから初心者には厳しかったよ……。

（この光景、律を作った開発者の人達はどう思うだろう……。今さっき私とやった将棋だって向こうからしたら必要のない機能だからね。向こうにバレたらまた元の固定砲台に戻るのかな？）

なんて事を思いつつ私はクラスメイト達に囲まれている律を見ていた。

くそしてく

次の日になると律は初期状態に戻っていた。どうやら昨日の夜に開発者の人達が来て暗殺に必要な部分を取り除かれたらしい。更に寺坂君がやっていたようなガムテープのグルグル巻きも次からは損害賠償を取られるそうだ。

『……それでは攻撃準備に入ります』

そうやって律の側面が開き中から銃……ではなく花束が出てきた。

『花を作る約束をしていました』

開発者にとつては必要のない改良だったとしても、律にとつては必要な改良だと律本体が思ったように開発者に反抗してバックアップを隠しておいたらしい。

そんな感じで律は改めてE組の生徒になったのだった。

『ラムさん、将棋をしましょう！次は勝ちますよ!!』

私はこの日から毎日の様に律から将棋を申し込まれ、その度に返り討ちにしてあげた。

### 第3話 結成！ラムちゃんグループ

「それでは皆さん気を付けて帰ってください」

HRが終わり帰る準備をする。殺せんせーもすっかり教師として馴染んでいるよね。……まあ私はまだ転校してから一週間くらいしか経ってない訳だけど。

「あつ、ラムさん。良かったら一緒に帰りませんか？」

そう言つて私に声をかけてきたのは神崎さん。その後ろには茅野さんと奥田さんがいた。この3人は修学旅行で同じ班だったそうだ。

「良いよ。ちやつちやと帰り支度済ませるね」

「あ、焦らなくても大丈夫ですよ」

「ううん、待たせるのも悪いしね」

今日予習する科目の教科書とノートを鞆に入れて準備OK！

「おまたせ。じゃあ帰ろうか」

くそして

「そういえばラムさんの家ってこの辺りなの？」

「そうだね。E組の校舎まで徒歩10分つてところかな」

「す、凄く近いですね……」

家から学校までが近いおかげでギリギリまで時間を使えるし、いざとなれば殺せんせーみたいに超スピードで学校に行けば良いだけだ。まあ悪目立ちしそうだから絶対にやらないけど……。

つて話してる内に私が住んでるアパートまで来ていた。

「じゃあ私は此処だから」

「え、折角だからもつとお喋りしようよ〜!」

「わ、私も迷惑じゃなかったらラムさんともつと話したいです」

帰ろうとしたら茅野さんと神崎さんに引き止められた。奥田さんはそんな2人を見てどうすれば良いのかわからないようであわあわとしている。

「じゃあラムさんの家で遊ぼう!」

えっ? 何これ? 私の部屋ゲームとか

ないよ? なのになんで私の家で遊ぶことになってるの? そんな事を考えていると奥田さんが心配そうに話しかけてきた。

「あの、もし嫌だったら言うてくさいね……?」

こ、断り辛い……。別に嫌じゃないけど、寄り道は余り良くないんじゃないかなって

話な訳だ……。

「別にいいけど、大したものはないよ？」

「良いの良いの！私達もつとラムさんの事を知りたいしね！」

「はい、ラムさんと仲良くなりたいです！」

「わ、私は修学旅行の時のラムさんの話を2人から聞いてもつとその話を聞いてみたいと思いました！」

そういえば奥田さんは2人と違って潮田君達と2人を助けに来た側だから2人程詳しくわかっていないんだ……。

「わかったよ。じゃあ私の部屋まで案内するね」

3人を連れて自室へと案内する。

くそしてく

「お、お邪魔します……」

「お、お邪魔します……」

「お邪魔します！」

……なんか茅野さんが段々と遠慮がなくなっているような気がするのはい気のせいであってほしい。

「飲み物持つてくるね」

「あつ、お、御構い無く……」

「いいよ。2人も茅野さんの様にリラックスしてて」

「というか茅野さんはリラックスしすぎな気がする……」

えつと、とりあえずジュースとおやつ用に数個作っておいたプリンでいいかな？

「おまたせ」

「あつ、プリン！」

茅野さんがいち早く反応した。プリン好きなのかな……？

「ありがとうございます」

「気にしなくていいよ。3人は御客様なんだからキッチンと歓迎しないとね」

「という事で頂きます。……うん、良い出来だね。」

「美味しい……」

「なんだか優しい味がします……」

「美味しいなんてものじゃないよ！しつとりとしていて滑らかな食感に優しい甘さ、それでいてくどくない。カラメルソースの苦味もこの甘さと凄く良い感じにマッチングして……。これなら何個でも食べられそう!!」

神崎さんと奥田さんが素直な感想を言った後に茅野さんの力説が入った。そ、そんな

に美味しかったのかな……？すると茅野さんが捲し立てるように此方に近付いてきた。「ら、ラムさん！このプリンは何処の御店?!私としたことがこんな美味しいプリンを見落としていたとは……」

「えっと、一応私が作ったプリンなんだけど……」

「て、手作り?!これが?!明らかにプロレベルだよ……」

なんか茅野さんが少女漫画にありそうなショッキングな表情をしていた。

「ラムさんって料理得意なんですか?」

「一人暮らしだから最低限の事は出来るつもり。御弁当も作ってるしね」

「おかわり!!」

「早っ。もう食べたの?」

茅野さんの食欲……この場合はプリン欲?に気圧されて予備のプリンを持ってきた。まさかこんなに好評だとは……。また作っておこう。

くそしてく

「じゃあ3人共気を付けて帰ってね」

それから私達が色々と話し込んでいる内に空が暗くなり始めていた。時間が経つのは早いものだ。送ろうとしたけど、3人がそれは悪いからと言って遠慮していた。

「はい、今日はありがとうございます」

「プリンありがとう!」

ちなみに茅野さんには御土産としてプリンを3つ渡しておいた。無茶苦茶嬉しそう……。

「あの、もしラムさんが良かったらなんですけど……」

「どうしたの?」

「これからもこの4人で集まりませんか?!」

奥田さんがそんな提案をする。確かに私もそろそろクラス内のグループとかに属した方が良くなって思っていたからこの提案は私にとっては魅力的だ。それに……。

(茅野さんの異質さの正体を見極める為という意味でも奥田さんの提案は悪くないからね……)

「私は良いよ」

「賛成!」

「わ、私も……!」

「じゃあこの4人でグループ結成ですね!」

こんな感じで『ラムちゃんグループ』が結成された。これを機に私は3人からラムちゃんと呼ばれる様になった。



## 第4話 LとR

転校してから早10日。私もこのE組という空気に馴染みつつ、今日も授業を受けている。ちなみに科目は英語でイリーナ先生が担当している。

大体の教科は殺せんせーが見るんだけど、この英語はイリーナ先生が、体育は鳥間先生が私達を教えている。前者の理由はイリーナ先生が殺せんせーよりも適任だから。後者の理由は殺せんせーだと常人離れな教え方しかしないため鳥間が先生が代わりに教えているという話を有希子に聞いた。

あつ、名前に関しては前に出来た『ラムちゃんグループ』の面子だけそう呼んでます。「日常会話なんて実は割と単純。アンタ達の周りにもいるでしょ？マジヤベーとかマジスゲーだけで会話を成り立たせる奴」

ああ、いるねそんな人。特に男子が多い。あとはトップカーストに君臨していたギャルっぽいイメージの女子。見滝原の学校でもいたよ。今いるE組だと中村さんがそんなイメージかも……。

「そのマジに当たるのが御存知 Reality。木村、言つて御覧なさい」  
「り、りありー……？」

「はい、駄目。LとRがごっちゃになってるわ。LとRの発音は日本人にとっては相性が悪いの。私としても通じはするけど、違和感があるわ」

同じ英語でもアメリカ英語とイギリス英語だと発音が異なるから現地の人聞いたらやっぱり気になるだろう。イリーナ先生は色々な国に行ったことがあるからかやはり細かい発音の違和感にも敏感なんだろうね。このE組にとつては特に良い先生になつているよ。

「LとRを間違えたら公開ディープキスの刑よ♪」

「これさえなければね……」

「じゃあ次は……ラムー！」

おっと、私を御指名か……

「はい」

「言ってみなさい。Reality」

「Reality」

「か、完璧じゃない……」

「ありがとうございます」

私もイリーナ先生程じゃないけど、日本以外にも何国か行ったことがあって、言葉も覚えたから日常会話くらいならある程度は出来る。さつき述べた様にアメリカ英語と

イギリス英語にも気を付けてるしね。

「アンタ達も見習いなさい。このように発音に気を遣い会話するとモテモテになるかもしれないわよ」

モテモテに……なるかなあ？ 私はそんなに興味ないからわかんないや。

くそしてく

放課後になり、日課になっている律との将棋対決で遊んでいたら物音が聞こえた。

『今の音は職員室からでしょうか……』

「ちよつと確認してくるね。王手」パチッ

『えっ、ちよつと待つてください！』

「ゆっくり考えてていいよ」

律にそう言つて職員室の方へと向かった。ちなみに完詰みの筈。

そんなわけで廊下に出てみるとイリーナ先生はワイヤーで吊るされていて、その横で1人の男性が話していた。この言語は確か……。

『あの、これをやつたのは貴方ですか……？』

私は現状を確認するためにさつき話していた言語で男性に聞いてみる。

『そうだが、君は一体……？』

『私はイリーナ先生に英語を教えてもらっている櫛ヶ丘中学校3年E組の生徒の大宮来夢です。ラムとでも呼んでください』

「ラム……」

「イリーナ先生、今降ろしますね……っ」と

とにかく吊るされているイリーナ先生を降ろさなきや。

「これは何の騒ぎだ!?!」

鳥間先生が職員室から出て来てこの状況を確認する。私は自身が断片的に見たことだけを烏丸先生に説明した。

「……それでおまえは何者だ?」

「これは失礼。私はイリーナ・イエラビッチを日本の政府に斡旋した者……とえば御分かりだろうか」

イリーナ先生を此処に来るように命令した人って事か……。

「もしや殺し屋ロヴロか……!?!」

「知ってるんですか?」

「現在は引退してるが、かなりの実力だ。今は殺し屋を育てていると聞く」

ふーん。裏舞台の事も調べてるなんて防衛省の情報網も大したものだね。

……だとすると何れ私についても何かしら掴むだろう。別に隠している訳じゃない

けど、態々言う必要もない。だから私から言うことはない。それに私だけじゃなく他にも隠し事をしている人がいるしね。

「例の殺せんせーは今何処だ？」

「……上海まで杏仁豆腐を食いに行つた。30分前に出たからもうすぐ戻るだろう」

杏仁豆腐か……。作つたことなかつたし、今度作つてみよつと。

「聞いていた通りの怪物のようだ……。イリーナ、おまえじゃ無理だ。今日限りで撤収しろ」

「っー」

「おまえは正体を隠している状態での暗殺なら比類ないが、素性が割れてしまえば一山いくらレベルの殺し屋だ」

「そんな事ありません！私の力なら……！」

イリーナ先生がそう言うのとロヴロと呼ばれる男性は一瞬でイリーナ先生の手首を掴み喉元に親指を突き立てた。

「相性の良し悪しは誰にでもある。それこそ此処がおまえにとつてのLとRなのではないのかね？」

ロヴロさんの言うことは尤もだ。普通の現場ならそうかもしれないけど、この櫛ヶ丘中学校3年E組という環境にとつてイリーナ先生は必要な人材だ。だから私は物申す。

「失礼します。ロヴロさん、意見宜しいですが？」

「ラム……といったな。言いたまえ」

「はい、ロヴロさんの仰っている事は半分正解で半分不正解だと思います」

「ほう、どうしてそう思うのかね？」

「確かにイリーナ先生は貴方の言うとおりの実力かもしれませんが。ですがこの空間に彼女は重要な暗殺者となるでしょう。既にE組にとつて彼女の存在は必要不可欠なものだと、少なくとも私はそう思っています。ですよ？殺せんせー」

「その通りですラムさん！」

殺せんせーの顔にはマルとバツの模様が浮かんでいた。……前々から思っていたけど、殺せんせーの皮膚つてどうなってるの？

「おまえが噂の殺せんせーか……」

「確かに彼女は暗殺者としては恐るるに足りません。クソです」

「誰がクソだ！アンタもラムを見習いなさい!!」

「ですがラムさんの言う通り彼女という暗殺者こそこの教室に適任です。殺し比べてみればわかりますよ。どちらが優れた暗殺者か……。2人の勝負です」

流石殺せんせー。私が言おうとした事を全部言ってくれた。

「……………」

「ルールは簡単です。この対先生ナイフで烏間先生かラムさんを先に殺した方が勝ちになります。イリーナ先生が勝てば残留。負ければ去るといっのはどうでしょう」

ん……………？なんかしれつと巻き込まれたんだけど？

「待て、何で俺が犠牲にされなきゃならんのだ!？」

「あの、私もですか？」

「だって誰も私を殺せないじゃないですか」

うわあ……………。凄い顔がシマシマしてる。

「……………まあ私はいいですよ。元とはいえ精鋭の殺し屋の実力を見てみたいですし、本物のナイフじゃなければダメージを受けることもないでしょうし」

「……………はあ、ラムさんが了承した以上俺が断る訳にもいかないな。わかった」

（それに殺せんせーが私を指名した理由も気になる……………。ロヴロさんに私の実力を見てもらうため……………？）

考えても仕方ない。なるようになれだ!……………でも折角だからイリーナ先生とロヴロさんが行ったら殺せんせーに言うだけ言ってみよう。

くそして

2人が行つて私達3人だけになったので殺せんせーに聞いてみた。

「殺せんせー、もしも私達が2人共かわす事が出来たらどうなるんですか？何か見返りがないとちよつと……」

「……そうだな。見返りがないと真面目にやつてられん」

「ふーむ……。でしたらその時は2人の前では1秒の間何があつても動かない事を約束しましょう」

なんと！言ってみるものだね。いつそのことイリーナ先生とロヴロさんと結託して……！

「言っておきますが2人には内緒ですよ。それを伝えて態と殺しに行かない……なんてことになったらいけませんから」

あつ、やつぱり駄目か……。

くそしてく

翌日。イリーナ先生は態とらしく烏間先生に仕掛けるが失敗。私は今後の方針を聞くべく職員室に寄つたが、烏間先生はいなかった。連絡をとると後で行くから適当に座って待っていてくれとメールにあつたので、近くにあつた椅子に座って待つことにした。



ガタツ！

しまつ……！椅子に細工が!?するとロヴロさんが此方に襲撃してきた。この態勢だとかわしきれない！

「もらった……！」

なら………！

ガシツ！

「なにつ!？」

私はロヴロさんの手首を掴みそのまま捻りあげた。危ない危ない……。殺られるところだったよ。

「ぐっ!？」

「残念でしたね。ですがまさか職員室に仕掛けを配置しているとは思いませんでした」

正直油断してた。家に帰ったら入念に鍛練した方が良いかな。

「それでどうしますか?まだやるなら場所を変える必要がありますが……」

「……いや、やめておこう。まさか中学生でこれ程の手練れがいるとは思わなかった。

それに今ので手首をやられた。片手では君やカラスマを殺すことは出来ないだろうからな……」

どうやらロヴロさんはリタイアのようだ。これでイリーナ先生の負けはなくなった。あとはイリーナ先生が烏間先生を殺すかどうかで感じか……。

「それじゃあ一緒に見に行きませんか？イリーナ先生が烏間先生を殺しに行く姿を」

「君は本気でイリーナがカラスマを殺せると思うか？」

「腕つぶしでは100%無理ですね。ですが……いえ、続きは2人の所に行つてからにしましょうか」

そう言つて職員室から出て校庭に向かうとイリーナ先生が作ったワイヤートラップによつて烏丸先生が捕まつていた。烏間先生も油断したね。ハニートラップだけだと踏んだ結果が生んだ醜態。

しかし詰めが甘いようで間一髪のところ烏間先生がナイフを止めた。

「ふん、頑張つたようだが、カラスマの方が1枚上手だったようだな。あれでは態勢を立て直されてそれで終いだ」

「いや、どうやらそうでもないみたいですよ？」

イリーナ先生が何かを言うと烏間先生は根負けしたのか大人しくナイフに当たつた。それによりイリーナ先生の残留が決定した。

「……これが君の言おうとした事なのか？」

「そうですね。イリーナ先生はきつと烏間先生の想像の上をいく行動によつて烏間先生を殺すと思つていました。『人は予想を越えてくる』……これは私に戦いを教えてくれた師匠が言つていた言葉で私も好きな言葉ですね」

あの人からは色々な事を教えてもらった。戦いは勿論、娯楽や文学、それにフアツシヨンなんかも……。

「その言葉の通りイリーナは予想を越えてきた……か。君程の手練れを育てた師匠とやらが言うならきつとそうなのだろう」

「はい、きつとそうです。これがイリーナ先生のLとRでしょう」

「……成程な。ところで君は殺し屋の世界に興味はないかね？」

「……なくはないですけど、遠慮しておきます。今回みたいな暗殺が特例ですからね」

「それは残念だ」

そんな言葉を残してロヴロさんは去った。

……でも少し惜しかったなあ。1秒あれば烏間先生はナイフを5撃当てることが出来たらしいし、私も暗殺寸前までいっただろうし。

くそしてく

「おい、なんだあの甲冑は……!?」

「……もしもの1秒間のために用意しました」

「せこい……」

だと思ったよ……。

## 第5話 殺せんせーと兄弟？の転校生

今日は転校生が来る日らしい。らしいというのは律から聞いたからだ。しかし私と律が来てからまだ2週間くらいしか経ってないのによくもまあそんな立て続けに来れるもんだ。そう思っていると私の携帯から律が私の疑問に答えた。

『本来は私とそのもう1人の転校生と一緒に転校してきて殺せんせーに暗殺を仕掛ける予定だったんです』

「と言うと？」

『私が遠距離担当、そしてもう1人が近距離担当だったんですけど、2つの理由で別々の転校という形になりました。1つはその人の調整によつて投入が大幅に遅れたこと、そしてもう1つが……私がその人よりも暗殺技術が大きく劣っていたからです』

律のあの性能でやつと一撃与えられるかだった。相性の問題もあるだろうけど……。そう考えるともう1人の転校生は殺せんせーに対する有効札があるということになる。

(……まあまだ見てないのに考えすぎても仕方ないか)

律との会話を終えて私はE組校舎に向かった。

くそしてく

転校生が来ると殺せんせーが言って入ってきたのは白装束だった。流石にあれが転校生って事はないよね？

ポンッ！

白装束の人は突然鳩を出した。手品師かなんかなの？

(……とはいえ何か企んでますよってオーラが隠しきれてないんだよね。まあ殺せんせーを欺けてるなら上等なのかな？現に殺せんせーはビビってるのか液状化して隠れてるし)

転校生の性格が少し特殊らしく白装束の人が紹介するらしい。辺りを見渡している白装束の人は一瞬カエデの方を見たのを私は見逃さなかった。カエデを知っているのかな……？

「おーい、イトナ！入っておいで！」

その合図でイトナと呼ばれる転校生が入ってきた。……壁を突き破って。

『ドアから入れ!!』

クラス全員が突っ込んだ。しかし転校生を見て気になることがあった。

「ねえイトナ君、ちよつと気になったんだけどなんで全然濡れてないの？外はあんなに土砂降りの雨なのに」

今赤羽君が言ったように転校生は全然濡れてない。その理由は彼から感じる異質さの正体が関係してそうだ。それにしても……。

(この異質さは感じ覚えがある……。有希子達と、そして殺せんせー初めて出会った日に感じた異質さだ)

「……おまえはこのクラスで2番目に強い。けど安心しろ。俺よりは弱いからおまえは殺さない。俺が殺すのは……」

転校生が殺せんせーの方を見て……。

「俺が殺したいと思うのは俺より強い奴だけ……。この教室では殺せんせー、アンタと1番後ろの席に座っている女だけだ。おい女、名乗れ」

殺せんせーだけじゃなくて私にも指名がきた。なんか教室中がざわめきだした。悪目立ち余りしたくないんだけど、指名されたからには逃げる訳にはいかないな。

「大宮来夢」

「ラムさんに目を付けるとは中々良い目をしてますねえ。ですがイトナ君、力比べでは先生と同じ次元には立てませんよ?」

とはいえ殺せんせーにはマッハ20の速度が出せる。そんな怪物に挑戦するってこ

とは相性有利と見てもいいだろう。

「立てるさ。だって俺達は血を分けた兄弟なんだから」  
『き、兄弟!?!』

転校生の兄弟発言にクラス全員が吃驚していた。

「先に死んだ方が負けな。兄さん」

という転校生堀部糸成による殺せんせー暗殺が始まろうとしていた。



## 第6話 気が付いたら審判になっていた件

殺せんせーと血を分けた兄弟という堀部君の衝撃発言に休み時間の話題は持ちきりだ。

2人の共通点としてかなりの甘党であること。これはカエデも同じだけど……。

次に2人は巨乳が好きで読んでいるグラビア雑誌が全く同じだった。岡島君の巨乳好き皆兄弟発言は女子として発言に困るのでスルーで。

すると潮田君とカエデが不破さんに殺せんせーと堀部君の兄弟発言に対しての考察みたいなのを話し合っていたので、興味深いから聞いてみることにした。

「きつと2人は同じ国の王子様なのよ！そして戦争で2人は離れ離れになってしまい、兄である殺せんせーが弟のイトナ君に生き延びてほしくてイトナ君を逃がした……。そして殺せんせーは記憶を失ってしまったのよ」

「……それで弟だけ人間体の理由は？」

「……突然変異？」

良くできた物語だったけど、まだまだ展開を作れてないね。答え合わせは放課後まで御預けかな？なら私なりの考察を律と話し合ってみよう。教室を出て律と話し合う。

「律は殺せんせーと堀部君が兄弟っていう点について何か思った？」

『……私は血を分けたという部分に引っ掛かりました』

……やっぱり律も同じ事を思ってたか。

『イトナさんと殺せんせーの2人には何かしらの共通点があるようですが……。ラムさんはどう思いますか？』

「血を分けたという発言から考えられるのは血 $\parallel$ 殺せんせーと同じ細胞ということ。つまり堀部君は……」

くそしてく

放課後になり殺せんせーと堀部君との決闘が始まる。

ルールは机に囲まれたリングから出たら負け、私達生徒に危害を加えたら負け、勿論死んでも負けという大きくわけて3つのルールで戦う。審判として白装束の人と私でやることになった。

何故私が審判をしなきゃいけないのかと考えたが私がルールを1つだけ作って良いと殺せんせーに言われたので、私なりに公平な決闘になるように考えた。

「それでは……暗殺開始！」

ザンツ!!

開始の合図と共に殺せんせーの触手が1本切られた。

『触手!?!』

堀部君の持つてる触手によって……。

く回想く

「つまり堀部君は殺せんせーと同じ触手を持っている」

『触手ですか……?!』

「正確には殺せんせーと同じ触手細胞を持っている……だね」

『ですがそれならイトナさんの発言にも合点がいきます』

「私としては引つ掛かる部分には別にあるけどね」

『別……?!』

「とはいえこれはまだ仮定の粋を出ないから考えるのはまたの機会にするよ。そろそろ休み時間も終わりそうだし」

とりあえず放課後まで待つとしよう。

「現在」

「何処だ……?」

殺せんせー……?」

「何処で手に入れたっ! その触手を!」

「君に言う義理はないね。だが殺せんせー、これで納得しただろう? 育ちも両親も違うが、この子と君は兄弟だ」

成程、今の会話から察するに殺せんせーの過去にあの白装束が絡んでいるっぽいね。そして異質さの正体が触手であることもわかった。

(じゃあカエデは……。カエデも同じものを持つてることだよな? カエデの事も含めて色々調べなきゃいけないね)

考え事していると辺りが光ったので見てみると白装束が殺せんせーに怪光線を浴びせていた。これはルール違反かな?

「この圧力光線を至近距離で照射すると君の細胞はダイラント挙動を起こし、一瞬身が硬直する。君の弱点は全て知っているんだよ」

「……確かにこの光線は私にとって痛手です。ですがルールを設定しているのは貴方だけではありませんよ」

「何を……?」

「堀部系成、反則！警告1回！」

私が堀部君の反則を宣言すると辺りがぎわめきだした。そして白装束が私の反則発言に抗議する。

「……………どういふつもりだい？」

「堀部君は反則を犯した……。それだけですよ。ちなみに反則警告2回で反則負けですよ」

「今の反則内容を聞いても？」

「堀部君は自身が殺せんせーよりも上だと示すための決闘なのに堀部君1人で殺せんせーに挑まず保護者に泣き付いていたからね。そもそもルールは一对一の決闘なのに横槍入れたら駄目でしょう。という事で反則です」

「屁理屈を……………！」

あらあら、白装束が心なしか怒ってるように見えるや。

ガシャンツ!!

「決闘、終わったみたいですね」

「……………」

「堀部系成場外！勝負あり！勝者殺せんせー!!」

殺せんせーが堀部君を場外へと追いやったためにこの決闘は殺せんせーの勝ちになった。

「先生の勝ちです。ルールに照らせば君は死刑ですよ。もう2度と先生を殺れませんねえ」ニヤニヤ

うわあ……。煽ってる煽ってる。

「勝てない？俺が……。弱い……。？」

堀部君の様子が変だな……。もしかして力が暴走してる？私も昔なつた覚えがあるけど、その兆候に類似してる。なら止めないと不味いよね。

「うぐつ……。あああああつ!!」

ドスツ！

「よっ……。と。白装束さん、保護者なら彼の暴走くらいなんとかしなよ」

私は堀部君の腹部に1発入れて気絶させた。そして白装束に毒づく。

「……。確かにこの子はまだ登校出来る精神状態じゃなかったようだ。転校早々なんだけど、暫くの間休学とさせてもらおうよ」

白装束が堀部君を抱えて去っていくのを殺せんせーが白装束の肩を掴んで止めようとするが、その瞬間触手が溶けた。どうやら着ている白装束に殺せんせーの弱点の素材をふんだんに使用しているみたいだ。

くそして

「殺せんせー、説明してよ。あの2人との関係を……」

クラスメイトがそう言うが、そんな簡単に話せるような内容じゃないだろうね。

「実は先生……」

ん？話すの？時期尚早だと思うんだけど……。

「人工的に作られた生物なんです!!」

っ！それってつまり……。

『………それで?』

「にゅやつ！反応が薄い!」

「知りたいのはその先なんだよ殺せんせー。イトナ君の触手を見てなんで怒ったのか、そして殺せんせーがどういう理由で生まれてきたのか……。そして何を思っE組に来たの?」

「残念ですが今それを話したところで無意味です。先に先生が地球を破壊すれば皆さん

が何を知ろうが全て塵になりますからねえ」

「……でも逆に私達が地球を救えば真実を知る機会が来るってことでいいんですよね？」

「その通りですラムさん！」

でも……。そのために私達は……。

「……？ラムちゃん、どうしたの？」

有希子が私を心配して声をかけてくれた。

「……ごめん、ちよつと気分が悪くてね。少し外の空気を吸ってくるよ」

私は外に出ていったきり今日教室に戻ることはなく帰路につき、明日にまた登校しては殺せんせーや有希子達に偉く心配された。



## 第7話 E組の教官は烏間先生以外ありえない

有希子 side

私、神崎有希子はとんでもない光景を目の当たりにしている。

「……私の大切な友達に何をしてくれるの？」

私達の目の前には今まで見た事のない冷酷な眼差しである青年の腕を掴んでいたラムちゃんがいた。

このような事になったのは今から30分程前の出来事……。

く回想く

ラムちゃんは今日用事があるとの事で学校には遅れて来るみたい。これに関しては殺せんせー達も容認している。なんでも暗殺に必要な事らしいけど……。

「俺の名前は鷹岡明！今日から烏間の補佐として此処で働く事になった。よろしくな。

E組の皆！」

そう言ってやって来た青年……鷹岡先生は烏間先生の補佐をすべく、早速今日から私達の体育を担当するそうだ。

鷹岡先生が置いたのはカエデちゃんが言うにはかなり有名所のスイーツ等。生徒の皆はそれに食い付く。

「物で釣ってるなんて思わないでくれよ？俺はおまえ達と早く仲良くなりたんだ！それには皆で囲んでメシを食うのが一番だろう？」

……なんだろう？何か違和感を感じるような。

食事が終わった後、鷹岡先生から新しい時間割が配られる。

「さて、訓練内容の一新に伴いE組の時間割も変更となる。これを皆に回してくれ」

時間割を見てみると授業が終わった後、夜の9時まで訓練となっていた。

「ちよつと待ってくれ！無理だぜこんなの！」

前原君が反対意見を述べ、それに賛同するように他の皆も続く。

「遊ぶ時間もねーし、出来る訳……！」

ドスツ！

前原君が否定しきる前に鷹岡先生が膝蹴りで黙らせた。そしてさつきまでの朗らかな雰囲気から一変して歪んだ雰囲気になった。

「出来ないんじゃない、やるんだよ……」

不気味な雰囲気を感じたまま鷹岡先生は話を続ける。

「抜けた奴は抜けても良いぜ？その時は俺の権限で新しい生徒を補充する。……だが俺はそんな事をしたくない。おまえらは大切な家族みたいなものだから、おまえらの父親の位置にいる身として誰一人欠けてほしくない」

そう言つて鷹岡先生は私に近付き……。

「俺達家族で地球を救おうぜ？」

鷹岡先生の腕に捉えられた。以前までの私なら恐怖によつて鷹岡先生に従えさせられていたと思う……。でもそれはラムちゃんとお会つて変わった。

初めて会つた時は高校生の人達から助けにくれた。イトナ君の時も私達に被害がないように気を遣つて審判役を引き受けたと殺せんせーから聞いてまた助けられたと思つた……。

ラムちゃんは私に勇気をくれる。この場にラムちゃんはいないけど、私に勇気を与えてくれる……。だから私は……！

「……嫌です。私は鳥間先生の授業を希望します」

強くなる為に勇気を出した。それが気に入らなかつたのか、鷹岡先生は腕を振りかぶる。私は殴られると思ひ、目を瞑つた。しかしそれが来ることはなく、恐る恐る目を開けてみると、鷹岡先生の腕を掴んでいるラムちゃんがいた。

「……私の大切な友達に何をしてくれるの?」

私にとってラムちゃんは救いのヒーローのようだった。

有希子 side out

〈現在〉

遅れてきた私は授業に参加しようとグラウンドに出る(場所はイリーナ先生に聞いた)と有希子が男に殴られそうになったので、未然に防ぐ為に私は男の腕を掴む。

「ぐっ……なんだおまえは!」

「……私は大宮来夢。柵ヶ丘中学3年E組の生徒。本日は訳ありで遅刻してきました。それでもう一度聞きます。私の大切な友達に何をしてくれるの?」

「俺はおまえ達の父親位置の人間だ。聞き分けの悪い子供に躰をしているだけだ!」

父親位置ねえ……。そんなのは家庭によってそれぞれだろうに。

「……ふーん。今時そんな父親は流行らないですよ?」

「……どうやらおまえも聞き分けが悪いみたいだな!」

男は私の腕を払い殴り掛かってきた。

「止めろ鷹岡!」

私が反撃しようとするのと鳥間先生と殺せんせーが慌てた様子でグラウンドに駆け込んで来た。

「おはようございます。殺せんせー、鳥間先生。それでこの男はなんなんですか？見たところ鳥間先生の知り合いみたいですが」

「……こいつは鷹岡と言つて俺と同じ防衛省で働いている」

「どういった人物なんですか？」

「……教官としては俺よりも優秀だと聞いている」

この男が鳥間先生よりも優秀？そうは見えないけどねえ……？

「俺の大切な家族だ。勿論手加減しているよ」

「……いや、貴方の家族ではなく私の生徒達です！私が目を離れた隙に何をやっている!?」

「なんだ？文句あるのかモンスター？体育の担当は俺に一任されている。それに短時間でおまえを殺す為の訓練だ……。多少厳しくなるのは当然だろう？こういう風にな！」  
何やら先生達が話し込んでいる間に律に事情を聞いていると、鷹岡と呼ばれた男が私に殴り掛かってくる。私はそれを難なくかわす。

「……鬱陶しいなあ」

「っ！」

「そこまでだ鷹岡。暴りたいのなら俺が相手になる」

いい加減煩わしくなったので睨んでいると、烏間先生が私達の間を割って入る。もうそのまま鷹岡とかいう奴を帰してほしいんだけど？

「烏間……。これは暴力じゃなく教育だ。やるなら暴力じゃなくあくまで教師として教育でやろう。烏間、こいつ等の中でおまえの一推しの生徒を一人選べ。そいつと俺が一對一で戦って、1度でも俺にナイフを当てられたらおまえの教育が俺よりも優れていると判断して出ていってやる」

烏間先生が優秀だと思っている生徒は複数いる。男子だと赤羽君、磯貝君、前原君、杉野君、木村君とあとは態度に難ありだけど、寺坂君。女子だと片岡さん、岡野さんかな？あとは力を抑えているカエデも。

「但し使うナイフはこれじゃない。殺す相手は俺なんだ……。使う刃物も本物じゃないとなあ？」

但しそれは殺せんせーを殺す為に使われる対せんせーナイフに限る話で、本物のナイフになると話は別。一介の中学生が本物のナイフを使うなんて況してや殺し屋でもない限り無理だろう。厭らしい性格をしているね。

烏間先生は悩んだ結果私の元に来て……。

「……ラムさん、頼めるか？」

ナイフを渡してきた。

「……………」

「……俺は地球を救う為の暗殺任務を依頼した側として君達はプロだと思っている。プロとして最低限払うべき報酬……当たり前前の中学生生活の保障を払うつもりだ。だからこのナイフは無理に受け取る必要はない」

……やっぱりわかっているね烏間先生。鷹岡なんかとは違って私達が中学生だと言う事を加味してくれている。それがわかった時点でE組の教官は烏間先生で決まりだよね。

「……その思い、伝わりました。ですので私はそのナイフを受け取ります」

私はナイフを受け取り鷹岡と対峙する。

「ふん、さっきの生意気な女か」

「どうも。それよりも私が貴方に1度でもナイフを当てられたら私の勝ちで間違いありませんか？」

「……ああ、間違いない。さあ来い!!」

鷹岡のあからさまな態度に対して私は特に構えを取らずに只立っている。

「……来ないなら此方から行くぞ!」

鷹岡が此方に殴り掛かってくるのを私は全部かわす。

「いのつ……！」

……鷹岡は見た通りのパワータイプ。烏間先生と同じ防衛省の人間だという話だからもうちよつと期待してたんだけど、つまらないなあ。

「な、何故当たらない!？」

「……はあ。もう良いや」

鷹岡の単調な攻撃に飽きた私は高速で鷹岡の後ろに回って首元にナイフを当てた。

「……これで勝負ありですよね殺せんせー?」

「はい。それにしても生徒に本物のナイフを持たせるなんて正気の沙汰ではありませんねえ」

そう言いながらナイフを食べてる殺せんせーも正気の沙汰じゃないよね。そんなに食べ物に困ってるの?今度御弁当でも作ってあげようかな……?」

「……ふむ、E組の新任体育教師の話聞いて足を運んでみたら何やら面白い光景が写っていますね」

そう思っていると一人男性が此方に来た。